植草学園短期大学研究紀要　第16号　31 ～ 37頁（2015）

子育て支援における学生の育ち

Growth of Students in the Child Care Support Practice

松原　敬子

乳幼児と関わる体験の機会が少ない学生にとっては、保育実習において乳児クラスに配属されると戸惑うことも多いのが現状である。ボランティア活動などを通して積極的に保育園や子育て支援センターに出向き、実際に乳幼児と関わる体験を積み重ねていくことが求められる。そこで、ゼミの授業の一環として子育て支援センターにおいて乳幼児の親子と関わる体験の機会を設けている。本稿においては、この実践報告を元に学生の育ちを検証し、保育者の資質の向上を図っていく示唆とした。また、子育て支援における活動を地域に繋げていく一助とするものである。

キーワード：子育て支援、保育者養成、実践力

１．はじめに

昨今の多様化する保育ニーズにおいては、これまで以上に高度な保育者の資質が求められている。平成27年度４月施行予定の子ども・子育て支援新制度では、幼児期の学校教育・保育・地域の子ども・子育て支援を総合的に推進するという趣旨のもとに制度の改善がなされ、子ども・子育て支援を社会全体で支援していくための方策が検討されている。さらに新たな幼保連携型認定こども園では、保育士資格と幼稚園教諭を併有する「保育教諭」の新設が予定され、養成校においても質の高い保育者の養成が求められているのである。

２．保育者養成校の課題

現代の学生は、人間関係の希薄さからコミュニケーション能力が乏しくなってきており、自分の居場所を見失い、自己肯定感の持てない学生が見受けられるようになってきた。保育者を目指す学生における授業においても特に創作課題等では、個人はもちろんのことグループワークになると、なおさら硬直して動けない様子も見られる。自分の気持ちを伝えたり、人と関わったりすることに苦手意識をもっている学生が多くなってきた。幼少時代に大人の考える学びを強いられ、常に大人から評価を受け、様々なあそびや創る喜びを体験することが少なく成長してきたことも一因としてあげられる。一方で少子化などを背景とした「大学全入時代」の学生に対する意欲喚起、学力向上が喫緊の課題になっている中では、保育者養成に携わる私たちの行っている教育やこれからの子育て支援社会において果たすべき役割について検討する余地があろう。

３．実践力の養成について

さて、養成校では現場で求められるスキルと専門性を実際に身につけさせて送り出しているだろうか？乳幼児と関わる体験の機会が少ない学生にとっては、実習に加えて積極的に保育現場や子育て支援センターなどに出向き、ボランティア活動などを通し実際に乳幼児と関わる体験を積み重ねていくことが求められる。そこで、乳幼児の親子と実際に運動あそびを通した実践事例について述べることにする。乳幼児と関わる体験の機会が少ない学生にとっては、保育実習において乳児クラスに配属されると戸惑うことも多いのが現状である。ボランティア活動などを通して、積極的に保育園や子育て支援センターに出向き、実際に乳幼児と関わる体験を積み重

植草学園短期大学

ねていくことが臨まれる。ゼミの授業では地域子育て支援センター「子育てひろば」に出向き、乳幼児の親子と関わる体験の機会を設けている。

一方、本学園併設による相談支援センターにおいても子育て支援講座「親子であそぼう」や学生の企画・運営による「運動会」を平成23年度より開催している。本稿においては、これらの実践報告を元に保育者を目指す学生の育ちを検証し、保育者の資質の向上を図っていく示唆とするものである。また、子育て支援における活動を地域に繋げていく一助としていきたい。

４．研究方法

１）対象：U短期大学福祉学科児童障害福祉専攻
　　平成23年度２年ゼミ生17名
　　平成24年度２年ゼミ生13名
　　平成25年度２年ゼミ生11名
　　平成26年度２年ゼミ生10名
２）期間：平成23～26年５月～12月
３）場所：T市子育て支援センター
　　「子育てひろば・T」
　　U大学附属相談支援センター
４）調査方法：自由記述式感想（回収率100％）

５．子育て支援センター「子育てひろば」における活動概要

T保育園内にある子育て支援センター「子育てひろば・T」には、毎月１回保育実践演習授業の一環として、３人程度が以下のような時間帯で乳幼児親子と関わる。

11：00～11：30　自由あそび
11：30～12：00　実践活動

実践活動では、絵本や紙芝居などの読み聞かせ・わらべ歌・手あそび・ふれあいあそび・親子体操などをメンバーが指導計画を立て親子の前で披露したり、一緒に行う。参加する学生は毎回違うが、実践状況を申し送りして、互いに内容を共有していく。

終了後には、担当保育士から評価をいただき振り返りに加え、今後の実践活動に活かしている。12月には「お楽しみ会」を企画し、劇の公演を行うことによりゼミの活動として集大成にしている。

１）活動の様子

初めて参加する学生にとっては、自由遊びの際に遊んでいる親子の中に入って行きづらく、子どもにもどのように声掛けをしたらよいのかがわからない。１年次には保育実習の観察参加実習の経験があり、乳幼児と関わってきているが、「実際に保護者がいると躊躇して消極的になってしまう」という学生の声も多い。しかしながら、経験を重ねていくと保護者とも何気ない会話ができ、自然体になっていく。また、実践活動においては、子育て支援センターに訪れる親子の人数が当日の天候により大幅に違ってくるので、指導計画にも柔軟さが求められる。実践活動の中では、予想が立たないことや偶然に起こり得ることも多くあり、状況判断力が求められ、臨機応変さが身についていく。ふれあいあそびや親子体操などは、保護者にも喜んでいただき、担当保育士からも高い評価を得ることができた。さらに貴重なアドバイスが振り返りに生かされていく。一方、劇公演は、附属幼稚園をはじめ学内の相談支援センターを含め計３回の公演を実施している。毎回、舞台環境が違い、演じる学生たちも戸惑うことが多かったが、回を重ねるごとに演技力や表現力が豊かになり自信に繋がった。子どもたちの反応も発達年齢により様々であることが実感でき、学生たちにとっては心に残る大きな感動を味わい達成感を得ることができた。クリスマスの時季に会場は「赤鼻のトナカイ」や「ジングルベル」など親子の歌声で包まれた。

６．「親子であそぼう」の取り組み

相談支援センターで行なわれる子育て支援講座「親子であそぼう」（２・３歳児対象）は筆者が担当講師を務めている。この講座にゼミ生が保育実践演習授業の一環として参加している。毎回、身近なもの（タオル・新聞紙・ビニール袋など）を使って遊びのバリエーションを乳幼児の親子に楽しんでいただく。始めは広々としたスタジオに戸惑う子どもたちも次第に笑顔が溢れ、大はしゃぎで走り回る姿が見られる。学生たちは、実際に親子の前でパフォーマンスを披露し、スタッフの役割も担う。実践を積み重ねた学生たちは、貴重な経験が大きな自信に繋がっている。

1）「親子であそぼう」の流れ
例；新聞紙であそぼう
（1）お集まり「パンダ・うさぎ・こあら」
（2）挨拶
（3）学生パフォーマンス
①ペープサート「犬のおまわりさん」
②表現あそび　　〃
（4）リズムあそび
①あくしゃでこんにちは
②げんこつ山のたぬきさん
③ごんべさんの赤ちゃん
（5）新聞紙を使ったあそび
①新聞紙あそび
ひらひらしたり、やぶいたりして遊ぶ。
②大きなボール
破いた新聞紙を大きなビニール袋に入れ大きなボールにして遊ぶ。
③ヨーヨー製作
破いた新聞紙を個別にビニール袋入れて、ヨーヨーにして遊ぶ。
（6）お話タイム
一人ひとりの名前と年齢を聞き子どもを紹介し、製作したヨーヨーを披露した。
（7）まとめ
母親がアンケートを記入している時には学生が子どもと折り紙製作をして遊んだ。

［学生の感想］
2）「タオルであそぼう」
一枚のタオルでたくさんのあそびへ発展させ、子どもたちが楽しく行っている姿が印象に残る。子どもたちは、大きなタオルになるととてもはしゃいだ。子どもが一番楽しんでいたのは、タオルに乗り引っぱってもらう遊びだ。今までおとなしかった子どもたちもずっと乗っていたいと、なかなか交代ができないくらい気に入っていた。

3）「新聞紙であそぼう」
新聞紙あそびは、広い空間でダイナミックに動き、子どもたちはとても喜んでいた。兄弟の小学生も参加していたので、動きが激しくなると危険の無いように配慮することも学生スタッフの役割であったが、指示を受けることが多かったので、学生自らが気づき動くことができるとよかった。子どもたちが退場する際は、ハイタッチをし、満足げな笑顔に短い時間であったがとても充実していた。

シャワー合戦!!

4）「ビニール袋であそぼう」
ビニール袋のように家庭で簡単に用意できる身近なものを使って、子どもたちのあそびを発展させることを学んだ。工夫一つで楽しいおもちゃになるこ

出発進行!!

釣れたよぉ～

とがよくわかった。また、このような家庭で楽しめる製作やあそびを提供していくことも保育者の役割だと感じた。今回の活動で学んだことをこれからの活動に繋げ、保育現場に立った時に活かしていきたいと思った。

［保護者の感想］
・タオルだけでこんなに遊べるとは驚いた。
・これからも子どもと一緒に遊んでみたい。
・家ではなかなか出来ないあそびを行い、とても楽しい時間を過ごせた。
・身近な材料でできるので、また家でも作ってみたい。
・思い切り体を動かし親子で大満足した。
・初めは人見知りをしていたが、最後は学生と楽しそうに遊んでいる姿を見ることができて嬉しかった。

7.「一緒にあそぼう」の取り組み

相談支援センターで行われる子育て支援講座「一緒にあそぼう」（3・4・5歳児対象）に保育実践演習授業の一環として参加した。学生たちは、実際に親子さんの前でパフォーマンスを披露し、スタッフの役割も担う。親子が楽しいひとときを過ごし会場は笑顔で溢れた。学生たちにとっては、貴重な経験が糧となり大きな自信に繋がった。初めは緊張していた子どもたちも学生たちの声掛けや他の子どもたちが遊ぶ姿を見て保護者の方から離れ、笑顔で元気一杯遊んでいた。手袋シアターを担当した学生は、子どもたちも保護者の方も真剣に見入っている姿にやりがいを感じた。また、親子体操ではスキンシップをとることが親子にとって大切であると改めて学んだ。次回もスタッフに入るのが楽しみになっている。

1）「一緒にあそぼう」の流れ
（1）挨拶
（2）学生パフォーマンス
①手あそび「始まるよ」
②手袋シアター「三匹のこぶた」
③ゲーム「こぶたちゃんのお引っ越し」
（3）親子体操
①ロボット歩き
②飛行機
③メリーゴーランド
④トンネルくぐり
⑤だいこん抜き
⑥ジャンプ・ジャンプ・ジャンプ!!
（4）リズムあそび
①げんこつ山のたぬきさん
②こぶた・たぬき・きつね・ねこ
③ごんべさんの赤ちゃん
（5）お話タイム
一人ひとりに名前と年齢を聞きながら、子どもを紹介し、好きなあそびについて皆の前で話をしてもらう。活動の中でできるようになったことを称え、全員で拍手した。
（6）まとめ
子どもの生活リズムの重要性や親子のスキンシップを図るには、親子体操が有効であると伝えた。母親がアンケートを記入の際には、学生が子どもと折り紙製作をして遊んだ。

親子体操「トンネルくぐり」

ゲーム「こぶたちゃんのおひっこし」

リズムあそび「ごんべさんのあかちゃん」

［保護者の感想］
・手袋シアターは、子どもが引き込まれて観ていた。
・下の子が離れないと思っていたが、学生の接し方がとても優しく、自分のところへ全く戻ってこなかったことに正直驚いた。
・積極的に遊びに誘ってくれて、子どもも嬉しそうだった。
・「こぶたちゃんのお引越し」は、子どもにも分かりやすく、とても楽しんでいた。
・体を使って遊んで心も体も大満足だ。
・親子体操は子どもと一緒に体を動かすことができて楽しかった。また遊びにきたい。

８．相談支援センター「運動会」の実践

相談支援センターに来室される保護者の多くから「運動会があると楽しい」「運動会を一緒に行いたい」という声を受け、教職実践演習の授業の一環として、学生の企画・運営による「運動会」を実施した。

「運動会」は平成23年度より開催し、今までに第４回を実施してきた。対象は２・３歳児親子と学生にとっては難しい年齢であるが、実施内容を３種目とし３グループに分かれ、それぞれが企画を重ねて実施に臨んだ。第１回目は、芝生のある中庭で実施予定であったが、晴天にも関わらず強風の為に外での実施を諦め、Ｅスタジオにおいての開催となった。以後、Ｅスタジオにおいて実施している。ミニ万国旗が会場の雰囲気に華を添え、訪れた親子の歓声に学生たちの士気も上がった。参加された親子のいきいきとした笑顔に学生たちも心躍り、達成感を得ることができた。

１）第１回「運動会」の開催
・日時：平成23年10月21日10：30 ～ 11：30
・場所：本学園Ｅスタジオ
・参加学生：児童障害福祉専攻２年17名
・参加者：１・２歳児親子18組
２）第２回「運動会」の開催
・日時：平成24年10月19日10：30 ～ 11：30
・場所：本学園Ｅスタジオ
・参加学生：児童障害福祉専攻２年13名
・参加者：１・２・３歳児親子21名
３）第３回「運動会」の開催
・日時：平成25年10月18日10：30 ～ 11：30
・場所：本学Ｅスタジオ
・参加学生：児童障害福祉専攻２年11名
・参加者：１～３歳児親子18組23名
４）第４回「運動会」の開催
・日時：平成26年10月17日10：30 ～ 11：30
・場所：本学Ｅスタジオ
・参加学生：児童障害福祉専攻２年10名
・参加者：０～３歳児親子18組20名

ここでは、平成26年度に開催された第４回「運動会」における実践を報告する。

（１）第４回支援センター「運動会」
～もりのうんどうかいプログラム～
①開会式
（はじめのことば・先生の話・サンサン体操）
②あつまれ！木の実
③お弁当はなぁに？
④ピクニックにいこう!!
⑤閉会式
（ごほうび・記念撮影・おわりのことば）
（２）各種目について
①あつまれ！木の実
（操作系運動スキル）

動物たちと一緒に木の実を拾おうという設定にした。２つのカゴを下において新聞紙で作った木の実を玉入れとして行った。最初は保護者からなかなか離れられない子どもたちも「動物たちが木の実をたくさん拾っているよ！」という言葉かけに、動物たちと一緒に楽しく玉入れを行った。

操作系運動スキル

平衡系運動スキル

②お弁当はなぁに？

（操作系運動スキル・非移動系運動スキル）

段ボール４つを組み合わせ１つの絵ができるようにパズルを作り、押したり引いたりしながら組み合わせた。子どもたちが何の絵になるのかと興味深く見ている姿や保護者に教えている様子が見られた。パズルが完成すると子どもたちの歓声が上がった。

操作系運動スキル・非移動系運動スキル

③ピクニックにいこう!!

（平衡系運動スキル・移動系運動スキル・操作系運動スキル）

フープ渡り・山登り・平均台渡り・トンネルくぐり・カゴ引きの障害物走とした。

一人でできないところは保護者とチャレンジした。２組ずつ子どもたちの名前を呼びスタートをしてゴールに向かった。観戦している親子は声援を送りゴールした親子には拍手で健闘を讃えた。

学生の自己評価は、最終種目として運動量もある「ピクニックにいこう!!」が一番高かった。次に「あつまれ！木の実」が高く、動物が登場し会場を盛り上げ、全員で玉入れを行えた点が評価された。「お弁当はなぁに？」では、パズル合わせが難しい年齢は保護者と一緒に行い完成を喜んでもらえた。

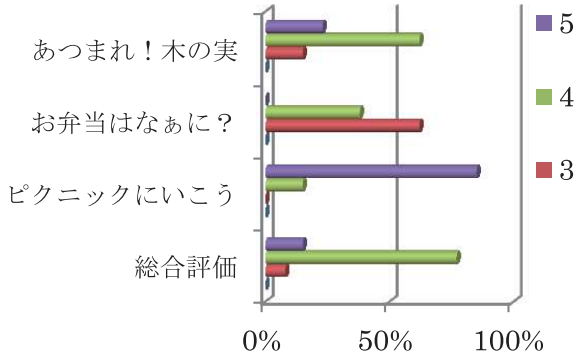

図１　学生の自己評価（ｎ＝10）

保護者の総合評価は、極めて高かった。

特に「ピクニックにいこう!!」は満足度が高かったことが伺えた。障害物競走として５種目を盛り込んだが、最後にかごを引く点が工夫されていたと評価された。「あつまれ！木の実」は、動物たちと一緒に木の実を拾うように玉入れを設定した点が評価された。「お弁当はなぁに？」は、パズルの大きさを年齢別に配慮した方がよかったという声が多くあがった。

（３）保護者の声

・年齢的にも興味のもてる遊びだった。

・子どもたちがやりやすいよう工夫されていた。

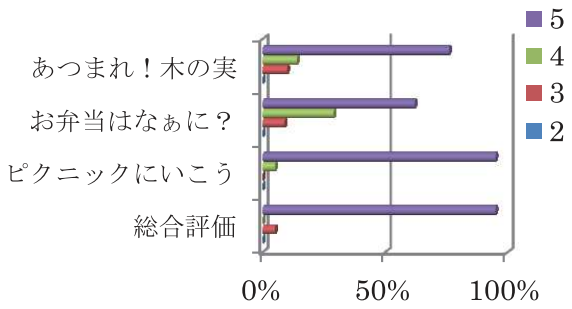

図２　保護者の評価（ｎ＝18）

・親子共々楽しめた。
・貴重な体験が出来た。
・ごほうびメダルがとても気に入った。
・学生が真剣に取り組む姿がよかった。
・年齢別にスタートした方がよかった。
・もう１種目あってもよかった。

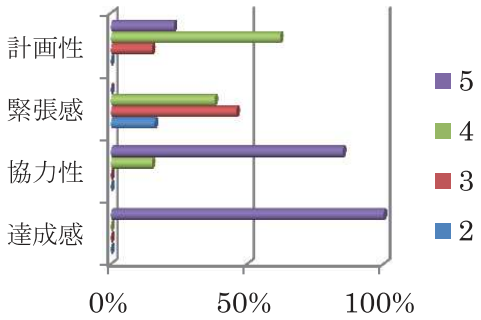

図３　学生の意識（ｎ＝10）

学生の意識では、達成感が最も高く、次いで協力性が高かった。計画性では、グループ毎に企画を進めた為、メンバー全員が全体の構成を把握しづらかった。しかし、リハーサル時に共通理解ができ、全体の流れを踏襲した。また、緊張感はあまり感じておらず、実習などの場数を踏んできたことが実証された。

学生の企画・運営による「運動会」の実践は、実際の乳幼児の親子から学ぶ貴重な体験となった。３種目の中に４つの運動スキル（移動系運動スキル・平衡系運動スキル・操作系運動スキル・非移動系運動スキル）を意識し、取り入れることができた。実践の場では臨機応変さが求められるが、子どもたちの満面の笑顔や保護者の声がよりよい運動会を提供していきたいと学生の励みになっている。

９．まとめ

保育制度が変化し、保育に対するニーズが多様化する中では、保育の質が問われる時代ゆえに、現場で生きる実践力と専門性を備えた保育者の養成に努めていかなければならない。これから日本の将来を担う子どもたちのよりよい成長に幼児体育が果たす使命は計り知れず、「子どもの最善の利益への寄与」に繋がるものと確信する。今後はさらに、子育て支援における活動を地域に繋げていきたい。

なお、本報告は以下で発表したものに加筆修正し、まとめたものである。

１）松原敬子（2012）「子育てひろばにおける学生の学び」日本保育学会第65回大会
２）松原敬子（2012）「子育て支援におけるミニ運動会の実践」日本幼児体育学会第８回大会
３）松原敬子（2013）「子育て支援におけるミニ運動会の実践Ⅱ」日本幼児体育学会第９回大会
４）松原敬子（2014）「いかに育む、『運動』を通した感動体験！―保育者養成校の立場から―」日本幼児体育学会第10回大会シンポジウム

参考文献

文部科学省（2012）「幼児期運動指針」